

海外便り

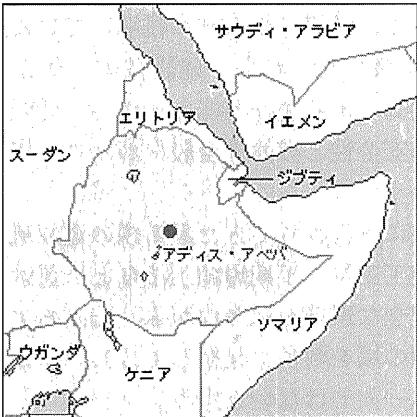
エチオピア通信

中山 実

1. はじめに

2002年4月よりエチオピアにJICAの技術協力プロジェクトで派遣されています中山と申します。これから毎月の連載で、JICAプロジェクトの現況報告やエチオピアの生活・文化などについて紹介させていただきたいと思っておりますので、よろしくおつきあいのほどをお願いいたします。

2. エチオピア雑感

まず初めに、エチオピア国についての概略を説明させて頂きたいと思います。正式名称は“エチオピア連邦民主共和国”と言い、人口は約6,000万人です。面積は109.7万km²で日本の約3倍ですが、私が当初抱いていた印象と比べると非常に人口が多いと感じました。ちなみに、私の職場におけるカウンターパートに日本の人口は1億3,000万人だと伝えても、全然信じてくれませんでした。なお、図-1の地図をご覧くださいもお分かりのとおり、エチオピアは海に面していません。これも私が当初抱いていた印象と異なるものですが、これは1993年にエリトリア地方が分離・独立したことによるものです。

私は現在、首都のアディス・アベバに住んでいますが、ここはなんと標高が約2,500mです。日本で言えば、乗

鞍岳ぐらいでしょうか。標高2,000m以下の高さでは蚊が発生するため、マラリアなどの感染症の心配があるそうです。そんな高いところなので、赴任前は高山病にかかるのではと大変心配していた記憶があります。案の定、到着後1ヶ月ぐらひは、日常生活においても、なにやら胸が圧迫された息苦しさを感じました。もちろん、階段を登る事も容易では有りません。余談ですが、エチオピアに関する赴任前の私の乏しい情報の中に“エチオピアといえば強いマラソンランナーの宝庫”というものがありました。実際に自分で生活してみて“こんな所で生活していると自然に強くなるはずなのに、さらに練習すれば、そりゃ強くなるはずだ”と思った次第です。さらに余談ですが、エチオピアに実際住んでみてそのエチオピアのランナーに勝つ高橋尚子選手のすごさに改めて感心しました。TVを見ている限り普通の所で普通に練習しているようにしか見えなかったのですが、標高2,500mを自分で体験してみると、普通に練習しているように見えるということ自体がかなりすごいことだと思います。



写真-1 アディス・アベバ市内の市場の風景

さて、話を元に戻しますが、やはり皆さんが一番気になるのは物価ではないでしょうか。例えばジャガイモやにんじんは1kg当たり3ブル(1ブル≒16円)で売られています。これは首都であるアディス・アベバでの価格ですから田舎に行けばもっと安いと思われる。一方、エチオピアのGNPは一人当たり約120ドルです。本当か!と驚かれる方も多いと思いますが、これはエチオピアの全ての人間を対象としているので、地方の部族に行けば、お金のない生活をしている事もあるようです。なにせ、エチオピアはすぐに頭に浮かぶ主な部族だけでもアムハラ族、ティグレ族、オロモ族、グラゲ族、アファール族、ソマリ族と6つありますし、いくつ部族があるのかもよく分かりません。カウンターパートのエチオピア人に聞いてもやはり分からないとのことでした。しかしながら、首都アディス・アベ

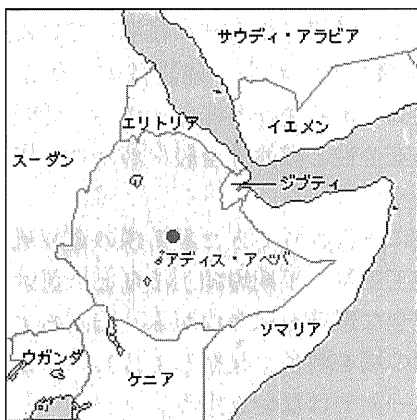


図-1 エチオピアの位置

バには、ビックリするような大金持ちが山ほどいる事も事実で、日本でも一般人には所有が難しいと思われる外車を取り回しています。私の行動範囲である首都付近を見渡す限りでは、人々が年間15,000円程度で生活できているとはとうてい思えません、このことからこの国の貧富の差が激しく、地方においては貧しい人々が殆どであることが容易に想像できます。

3. エチオピアにおける建設機械

エチオピア国内の道路は、長年の内戦と道路保守不足のため損傷がひどく、経済・社会の復興、特に物資輸送に多大な支障をきたし、同国政府が最重要課題としている「貧困削減計画」に大きな影響を及ぼしてきました。そこで、エチオピア国からの強い要請が日本国にあり貧困削減計画の中で最重要課題としている道路セクターへの援助を行う事になりました。また、道路セクターの人材育成は、日本国の国別重点援助分野の一つでもあります。

本プロジェクトは、簡単に述べれば、エチオピア国内の建設産業振興策に対して、建設の機械化を通じた日本の建設産業育成の経験を伝えるという事です。プロジェクトの詳細については、「建設の機械化」2002年7月号の「アムガナ道路建設機械訓練センタープロジェクト」を参照してください。エチオピア国内を視察して思う事は、日本メーカーの建設機械がかなり多い事です。また、地方出張で現地の職員と会話をしてみても、“日本の建設機械は性能が良いからこわれにくい”、“この建設機械があるおかげで助かった”等々、日本のこれまでの援助に対する感謝の言葉が数多く聞かれました。これは、日本国がエチオピア国に対して、これまで多くの援助を行ってきた証であると同時に

に、数多くの日本の技術者達の努力・苦勞がエチオピアの生活を支えているのだと感じました。私が、それらの建設機械等を製作した訳ではないので、私が感謝されることではないのですが、日本の多くの技術者達に日本から何千kmも離れた奥地で生活をしている人達が感謝していること、そして彼らの生活を支えていることをこの場を借りて伝えたいと思います。

しかし、同時に修理不能となって山積みされた廃車も同じぐらい見受けられました。彼らが言うには、“自力で整備する技術がないので使えない”とのことでした。まさにその通りで、稼働する建設機械が少ないため、道路建設、保守工事がうまく機能せず、また、それぞれの技術も持っていないので、結果として、一定レベル以上の道路環境を確保することができず、まさに貧困の悪循環に陥っているのだと思われました。エチオピアでの本プロジェクトの意義の大きさを知った瞬間でもあります。



写真—3 廃棄された建設機械



写真—2 実習現場の風景（右端が筆者）

4. おわりに

私自身、海外援助プロジェクトに携わるのは今回が初めてです。エチオピアに来るのも初めてです。未知の世界に乗り込むというのは、大変不安もありました。アフリカでピカイチと言われるほどの頑固さを国民性として備えています。この頑固さは特筆されるべきものである、この連載の中で、是非、説明させて頂きたく思っています。

次回からは、文化や日常生活（苦勞話や日本では到底目にかかれぬ光景等）を織り交ぜながら、本プロジェクトを理解して頂くと共に、エチオピアそのものを理解して頂こうと思っています。